

〈研究ノート〉

文体事象以外におけるキアスムス的様態の広がり 事例としての状況対応型リーダーシップモデル

大喜多 紀明

1. はじめに

旧約聖書研究における文芸学的方法論に言及した野本（1978）は、文体事象の研究におけるキアスムス（chiasmus）研究の有用性を以下のように述べた。

また、個別的な形ではあるが、文体事象そのものに対する関心は以前よりも強まってきており、とくに交差配列法（Chiasmus）に関しては比較的多くの研究が発表されている。このような文体分析の基礎的作業は非常に重要であるが、そのための技法に習熟するためには、E. König や E. W. Bullinger の書物のほか、W. Buhlmann-K. Scherer の「聖書の文体のあや」の小事典¹が1972年頃までの文献ものっており、便利である。これらをヒントとして、さらに多くの文体事象を認識し得るならば、構造分析はもちろんのこと、伝承史的考察にとっても重要なデータとなるので、文体分析は旧約学における文芸学的作業のひとつとして、基本的位置を与えられるべきであろう。

テキストに埋伏するキアスムスに関する分析は、旧約聖書の研究における文芸学的作業の基本的な手法の一つとして位置付けられている。こうしたテキスト分析は、旧約聖書の範疇にとどまるものではなく、新約聖書においても同様におこなわれてきた(例

1 Buhlmann & Scherer (1973) を参照。

えば、前川：2013、城：2016、Luter & Lee：1995 など）。こうした一連の先行研究は、旧約・新約聖書の基本的な修辞技法の一つがキアスムスであることを示している。

なお、本稿では、下記のような対称性の富んだ配列を持つ形式をキアスムスと呼ぶことにする。

$$A \rightarrow B \rightarrow \dots (X) \dots B' \rightarrow A'$$

キアスムスには、テキストの前半に出現した要素が、後半では、前半に出現した順序とは逆の順序で次々出現するという特徴がある。なお、「X」²はテキストの構造上の中心に位置する要素を示すのであるが、かかるXは存在する場合と存在しない場合とがある。本稿では、キアスムスの図式を、以下のように表記することにする。

$$\begin{array}{l} A \dots \\ B \dots \\ (X) \dots \\ B' \dots \\ A' \dots \end{array}$$

キアスムス形式の使用は、聖書だけにみとめられるものではない。古い事例を挙げれば、例えば、この形式の使用はシュメール時代のアッカド語やウガリット語のテキストからみとめられる³。また、「キアスムス」の呼称はヘルモゲネス（Hermogenes）の命名によるものである。森（2007）はこうした点について以下のように述べた。

こうした交差配列は、およそいかなる言語世界にも見いだされ、古くは紀元前三千年紀のシュメール時代からすでに用いられている。たとえば、シュメールの諺のひとつ、「主人のように建てて奴隷のように住み、奴隷のように建てて主人のように住む」は $ABB' A'$ の形をとっている。

2 「X」はギリシャ語の「カイ」であり、キアスムスの折り返し箇所（あるいは転回点）に配置された、対応を持たない要素を示す記号としてしばしば使用される（他の任意のアルファベットが使用される場合もある）。かかるXは、キアスムスの「核」とも呼ばれる。

3 例えば、McCoy（2003）は次のように述べている。「Chiasmus has been found as early as the third millennium B.C. in the organization of certain Sumero-Akkadian and Ugaritic texts.」。

下ってローマ帝国の時代に、ヘルモゲネス（紀元二世紀のギリシア人修辞家）がこの手法を $\chi\alpha\sigma\mu\acute{o}\varsigma$ と名づけ、爾来、〈キアスムス〉という呼称が修辞学的述語として定着して行くのである。

さらに、松村（2020）は、キアスムスの使用については「古くから世界各地で行われてきた」と述べ、実際に多様な範囲のテキストにキアスムスの使用がみとめられることを示した。一方、松村（2020）が指摘するように、キアスムスは「万人に知られてきたとも、非常に多くの作品に用いられているとも言い難い」技法であり、かつ、「聖書学者、古典学者、神話学者の場合でも、誰でも知っているとはいえない」ものであると述べ、当該技法あるいは形式は、一般的には知名度が十分に高いとはいえないものであることを示した。とりわけ日本においては、キアスムスを自覚的に援用してきた大部分が聖書研究の分野であるといえる。

ひとえにキアスムスといっても、その規模や構成、対応のあり方は多様である。規模についてみるならば、上述の森（2007）が例示した $A \cdot B \cdot B' \cdot A'$ 型のような単純なものから、テキスト全体を覆う、いわば構造レベルのものもある（例えば、村井：2009、大喜多：2019 など）。ここでは、キアスムスの事例として、聖書テキストにみとめられる2例を紹介しておく。

まず、規模が小さい事例である。柊（2018）は、マタイによる福音書2章20節から2章22節の範囲に、 $A \cdot B \cdot B' \cdot A'$ 型のキアスムスの存在を指摘した。以下は柊（2018：2 - 3）である。

イエスの誕生を告知する1:20は用語法としては、 B, B' と同様であるが、誕生物語全体の文学的構成からすれば、これを除いた他の四か所が、 $A \cdot B \cdot B' \cdot A'$ のキアスムスで形成されていると見るのが妥当であると考えられる。

X 1:20 見よ、主の使いが夢で彼に現れて言った。

A 2:12 ところが、夢で警告され、～自分たちの所に退いて行った。

B 2:13 見よ、主の使いがヨセフに夢で現れて言った。

B' 2:19 見よ、主の使いがエジプトにいるヨセフに夢で現れて、(20)言った。

A' 2:22 ところが、夢で警告され、ガリラヤ地方に退いて行った。

この柊の報告によれば、マタイによる福音書の当該箇所には下記のキアスムスがみとめられる。

- A 2章12節
- B 2章13節
- B´2章19節
- A´2章22節

続く事例は、上述のものよりも規模が大きい。森（2007：59 - 60）では、ルカによる福音書8章26節から39節の範囲で下記のキアスムスがみとめられることが紹介された⁴。このキアスムスには合計8対の対応がみとめられる。

A 墓場にばかりいる悪霊憑き	27b, e
B 家に居つかない人	27d
C イエスと無関係でありたいとの願望（反発）	28
D 退去を命じるイエス	29a
E 狂気（着物も着ないで、凶暴性を発揮）	27c, 29b, c
F はいり込んでくる悪霊	30c
G 落ちて行くことを恐れる悪霊	31
H 豚の中に入ることを願う悪霊	32b
I イエスの許可（核）	32c ⁵
H´豚の中に入る悪霊	33a
G´落ちて行く悪霊	33b
F´追い出された悪霊	35c β 〔原典〕
E´正気（着物を着て、端座）	35c α, γ, δ 〔原典〕
D´退去を求める住人	37a
C´イエスのお供をしたいとの懇願（敬慕）	38a

4 当該構造のような、構造の中心に「核」を持つ構造を森（2008）では「集中構造（concentric structure）」と呼び、キアスムスと区別した。なお、この「核」を大林（1979）は「転回点」と呼んだ。一方、『更級日記』の構造分析をおこなった藤森（2014）などでは、「核」を持たないキアスムス構造を指して「コンチェントリック」（つまり、いわゆる集中構造のこと）と呼んでいる。また、コンチェントリック構造の日本語での呼称は、主に集中構造である（例えば、飯（2010）、村井（2011）など）が、藤森（2014）では、集中構造という日本語での呼称を使用せず、「求心的軸対称構造」という呼称を使用している。つまり、concentric structure の和訳呼称および定義は、ともに定まっているとはいえない。本稿では、集中構造をキアスムスの一種とみなすこととし、「核」の有無により構造を区別しないことにする。

5 森（2008）の図式では、「核」の文字スタイルが「太字」である。

B´ 家に帰される人	38b, 39a
A´ 町なかへ出かけて行く主の証人	39c, d

なお、森（2008）は、このキアスムスが他の並行記事⁶（マタイによる福音書 8 章 28 節 - 34 節，マルコによる福音書 5 章 1 節 - 20 節）にはみとめられないものであり、当該テキストの著者であるルカの創作によるものであると述べた。

ところで、キアスムスに関する研究は、キアスムス以外の名称も使用されておこなわれてきた。このことについて、松村（2020）は以下のように述べた。

旧約学・新約学ではキアスムスとかキアスムス的構造（chiastic Structure）という呼び方多い（中務 2013）。西洋古典学ではリング・コンポジション（ring composition）とかヒュステロン・プロテロン（hysteron proteron, 「前後逆転」の意）とかインクルシオ（inclusio）と呼ばれていることが多い。フォークロア研究では折り返し構造（inverted structure）とかV字構造⁷とも呼ばれる⁸。

このように、キアスムスと事実上同一であるといえる文体事象でありながら、学問分野により⁹、それぞれ異なる名称が使用されてきた¹⁰。松村（2020）は、こうした用語の不一致の理由について、下記のように、学問分野間の相互理解の不足に一因があると指摘した。

諸学問分野の交流は理想的には理解され、現実にも多く試み慣れているが、こ

6 他の福音書における同様の内容の記事のことを「並行記事」と呼ぶ。

7 当該構造について、高橋（2009）は、かかる物語および、かかる物語が物語られる時間進行にしたがって展開される様態の変化を「V字プロセス」と呼んだ。

8 これらの他にも、キアスムスと類似した用語に「antimetabole（アンチメタボール）」があり、双方を区別する場合と区別しない場合がある。例えば、Wiseman & Paul（2014）は双方を区別していない。

9 実は、同一の学問分野内でも、用語の統一がみとめられない場合がしばしばある。

10 松村（2020）が列挙した以外、キアスムスの日本語訳のみをみても「交差対句法」、「交錯配列法」、「交錯配語法」、「交錯的配語法」、「交叉配語法」などの異称がある。なお、宮本（2009）は、キアスムスを「交差対応的配列法」と呼んだが、当該交差対応的配列法の事例として宮本が示した構造の中心には「核」があるので、宮本の構造は、森（2008）の論に基づけば「集中構造」であり「キアスムス」ではない。また、佐々木（1997）が示す「キアスムス」（佐々木の日本語訳は「交錯対句法」）にも「核」がある。このように、かかる用語の定義は極めて混乱しているといっても過言ではない。

こでの用語の多様性、不統一が示すように、必ずしも実現化していない。方法論においても、それぞれの分野が独自に発案したと想定しても、実は他分野においても同種のもので発案されており、相互にその存在を知らないままであるということが認められる。

以上を踏まえ、本稿では、まず2節において、松村(2020)が指摘した、事実上キアスムスといえる文体事象に基づいてテキスト分析(つまり、文体事象としてのキアスムスに基づく分析)がおこなわれてきた分野を、松村(2020)の知見に基づいて列挙する。そのうえで、テキスト分析とはいえない(つまり、文体事象とはいえない)分野に関して、松村(2020)の知見に基づき列挙する。あわせて、文体事象とはいえない分野(non-linguistic and extra-linguistic dimensions)に関するPelkey(2013)によるキアスムスの研究史の概略を紹介する。そのうえで、3節以降では、リーダーシップモデル論について、キアスムスと関連づけつつ考察することにする。なお、本稿でとりあげるリーダーシップモデルは、状況対応型リーダーシップモデルである。

2. キアスムス研究の広がり

松村(2020)は、文体事象としてのキアスムスに基づく研究がおこなわれている分野を次のように示した。

<文体事象>

- ・旧約聖書
- ・新約聖書
- ・ギリシャ(『イリアス』・『オデュッセイア』・『神統記』など)
- ・ラテン(『アエネーイス』・『ローマ建国以来の歴史』など)
- ・メソポタミア(シュメール・アッカド)
- ・ウガリット
- ・ゲルマン(『ベオウルフ』・グリム童話)
- ・キリスト教(『告白』)
- ・イラン(『アヴェスター』)
- ・アラブ(『コーラン』)
- ・中国(『詩経』)
- ・日本(『古事記』・アイヌ口承伝承)

また、松村（2020）は文体以外の事象について、下記の分野を列挙した。

＜文体以外の事象＞

- ・ 図形
- ・ 彫刻
- ・ アニメ

Bruhn（2015）は、Turner（1991）を引用しつつ、キアスムスが、概念や言語以前の心のパターンであり、脳の半球体における鏡面对称の構成に由来する可能性を指摘した。

Chiasmus is one such pattern that is antecedent to and more abstract than the linguistic elements it organizes, as its mobility across all levels of linguistic structure, and indeed beyond, suggests. Chiasmus is thus not merely a “grammatical figure by which the order of words in one of two parallel clauses is inverted in the other” (“Chiasmus”) but rather a pre-conceptual, pre-linguistic (“eidetic”) pattern of mind, or, in the more precise terms of cognitive science, an embodied schema that derives from the bilateral symmetry of our bodies, especially as expressed in the hemi-spheric and mirror-symmetrical organization of our brains.

Douglas（2007）や Nanny（1988）も同様に、キアスムスが左脳と右脳の双方の機能に関連していると述べている。こうした説に基づけば、キアスムスは、人間の営みのあらゆる場面に影響を与える機能に基づく形式である可能性がある。

人間の左脳は、主として「論理的」、「生理的」、「分析的」、「デジタル的」、「文字的」、「ロゴスの」、「代数的」な考え方の時に、右脳は「情熱的」、「感性的」、「総合的」、「アナログ的」、「イメージ的」、「パトスの」、「幾何学的」な働きとして機能すると考えられている（例えば、堀川：2008、品川 & 菊池：1986）。

左脳	右脳
論理的	情熱的
生理的	感性的

分析的	総合的
デジタル的	アナログ的
文字的	イメージ的
ロゴスの	パトスの
代数的	幾何学的
統辞的	系列的

キアスムスは、統辞的 (syntagmatic) 見方と、系列的 (paradigmatic) 見方の双方の側面が統合された形式を持つとされる (大林：1979)。ここで、物語の統辞的構成は、要素どうしの論理的な連なりに注目するわけであるから「論理的」(あるいは「ロゴスの」)であり、系列的構成は、物語に埋伏する要素間の対応関係に注目するわけであるから「感性的」(あるいは「パトスの」)であるといえる。つまり、統辞的見方が左脳的であるといえ、系列的見方が右脳的であるといえる。以上のように、キアスムスは、ロゴスとパトスが統合され、構造化された形式である。換言すれば、心性におけるロゴスの側面が統辞的に、パトスの側面が系列的に外化し、これらが統合された形式がキアスムスである。このように、キアスムスは言語以前の心のパターンと深く関係している。

一方、Pelkey (2013) は、まず、古代の文体事象を題材に、キアスムスの機能が装飾や記憶補助であるという Nanny (1988) の説を紹介した。そのうえで、キアスムスの機能が、かかる装飾や記憶補助にとどまるものではないという Heil (2007) や Fahnstock (1999) の説を紹介した。さらに、Pelkey (2013) では、非文体事象を対象とするキアスムス研究の嚆矢が Merleau-Ponty による研究¹¹であり、以降、文化 (Wiseman & Paul : 2014¹², Strecker & Tyler : 2009)、社会的相互作用 (Carter :

11 例えば、Merleau-Ponty (1964) がある。なお、Merleau-Ponty は「chiasm (キアスム)」という呼称を使用している。

12 Wiseman & Paul (2014) では、Jacques-Marie-Émile Lacan の精神分析とキアスムスの関連についても、精神科医である Alain Vanier の言葉を引用し、次のように述べている。「Vanier provides a compact and lucid account of the thinking of Lacan in this connection. For Lacan the chiasmic turning point or division is also the point around which revolves our predicament as beings cut off from a primordial totality, selves separate from the Other. The importance of chiasmus to psychoanalysis seems indeed sufficient to justify Lacan's resonant declarations that the psychoanalyst is the sophist and the rhetor of our time.」。つまり、Lacan は、精神分析においてキアスムス的な発想を示した。

2010)¹³, メディア (McLuhan & McLuhan:1988), 心理学 (Isar:2005), 哲学 (Gasché:1999) といった分野において, キアスムスを前提とする研究がおこなわれてきたことも紹介されている。

それ以外にも, Pelkey (2017a) や Grausso (2020) は, 認知論や身体論においてもキアスムスの観点があることを述べた。また, Pelkey (2017b) では, キアスムス(および, これに包括される記号としての「X」)を, 身体運動における構造化された記憶や人間の文化に浸透したパターンとして記号論の観点から位置付けた。また, 経済資本と文化資本の変移を示す図式の呼称としてのキアスムス (Bourdieu :1979) も知られている。本稿でとりあげるリーダーシップモデルは文体以外の事象に相当するのであるが, 上述の一連の先行研究では言及されていない。

3. 状況対応型リーダーシップモデル

日野 (2006) は, 状況対応型リーダーシップモデルを以下のように説明した。

そもそも, 状況対応リーダーシップ¹⁴の原点は, Hersey& Blanchard (1969)にあるが, ここで提示された呼称は, リーダーシップのライフサイクルモデルである。フォロワーの成熟度合いに応じたリーダーシップという考え方には, フォロワーの成長が必然的に含まれるとあって良い。フォロワーの成長を促すように S 1 から S 4 へと行動様式を変えていく必要がある。即ち, 意欲も能力も欠くフォロワーに対しては, 意欲を引き出すために, タスクについて詳細な指示を与えることを徐々に減らし, 向上・発展を励ますことを徐々に増やしていくようなリーダーシップ, つまり, 説得的なリーダーシップスタイルを徐々に取り混ぜることによって, フォロワーの成長が促せるとしている。結局のところ彼らは, リーダーはフォロワーの成熟度に応じて行動スタイルを変化させなければならないという主張, またその成熟, 成長を促すようなリーダーシップスタイルをとらなければならないという主張をしていることになる。これらはわれわれの日常感覚から見ても, 素直にうなずけるものである。

13 Pelkey (2013) が引用した Carter (2010) は, Pelkey が 2012 年 6 月 11 日に閲覧し, 紹介した web ページは <http://docs.lib.purdue.edu/clcweb/vol12/iss14/14> なのだが, 現在では閲覧ができない。本稿の引用文献欄では, 2021 年 5 月 28 日の時点で閲覧可能な URL を示した。

14 「状況対応型リーダーシップ」は「状況対応リーダーシップ」と呼ばれる場合がある。

簡単にいえば、状況対応型リーダーシップ理論では、フォロワーの成熟度合いに応じて、リーダーシップのスタイルを変容させる（例えば、網：2016、シーエルエス・グループ：2005）。仮に、フォロワーが順当に成熟した場合、フォロワーの能力および意欲は次のように変化する。

以下、状況対応型リーダーシップ理論における、フォロワーおよびリーダースタイルの概要と図式を示す（網：2016）。ここでの「R」は「レディネス（Readiness）」の英語の頭文字であり、フォロワーの状況を意味する。

R1（能力低い・意欲低い）

↓

R2（能力低い・意欲高い）

↓

R3（能力高い・意欲低い）

↓

R4（能力高い・意欲高い）

こうしたフォロワーの成熟に応じ、リーダーシップスタイルは次のように変容する。ここでの「S」はリーダーシップの「スタイル（style）」の英語の頭文字）を意味する。

S1：教示型（あるいは、指示型）

↓

S2：説得型（あるいは、コーチ型）

↓

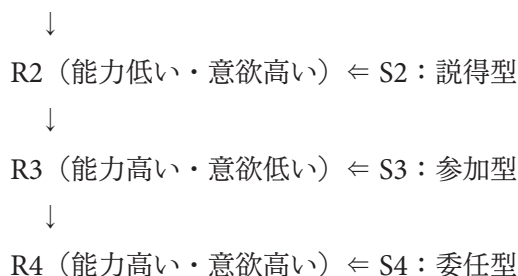
S3：参加型（あるいは、援助型）

↓

S4：委任型

畢竟、R1の状況のフォロワーにはS1のリーダーシップのスタイルで、R2にはS2、R3にはS3、R4の状況ではS4というように、まさしくフォロワーの「状況」に「対応」し、リーダーシップのスタイルを変容させるのである。

R1（能力低い・意欲低い）⇐ S1：教示型



ただし、こうしたフォロワーの成熟過程は不可逆的ではない。つまり、仮にフォロワーの成熟度が退行した場合、その段階に応じたリーダーシップスタイルが施される（網：2016）。したがって、状況対応型リーダーシップを効果的に機能させるには、フォロワーの状況を的確に診断・把握し、かかる状況に応じたリーダーシップスタイルを選択する必要がある（例えば、前田ら：2015）。かかるリーダーシップスタイルの選択の適合性について、網（2019）は次のように述べた。

レディネスとスタイルが適合しているかどうかを測るスタイル適合性、スタイルをいかに柔軟に状況によって変更できるかを示すスタイル柔軟性、そしてもっとも重要なポイント、その診断結果は自己認知なのか他者認知なのか、などリーダーシップが効果的かどうかを検討すべき重要なポイントを示しています。

一方、フォロワーの状況への臨機応変な対応に対し、かかるリーダーシップの有効性を説きつつも、フォロワーへの「扱いの不平等さ」に対する不満が生じる可能性を白井（2020）が指摘した。この点については、リーダーシップモデルを組織に運用することの説明をおこなうこと、適切かつ公平・公正な運用をおこなうことにより、かかる課題を解決に導くことができると述べた（白井：2020）。

組織は様々なスキルや考え方をもつ人間で構成されます。特に大手と比べて採用力で劣る中小企業には色々な意味で多様な人材が集まっています。リーダーシップには様々な型や理論がありますが、このような組織特性を持つ中小企業では部下の状況に応じてリーダーシップを変えていくことの有効性は高いです。

しかし一方で、部下から“扱いが不平等だ”という不満も発生します。接する上司の態度が違うということに不平等感を感じてしまう状態です。

これに対しては、リーダーシップの意図を正しく説明することが必要です。その上でリーダーは“公平・公正”にリーダーシップを運用することが大切です。

スキルや意欲の高低が違うことに対してそれに応じたリーダーシップをを〔原文ママ〕適用することは公平・公正ですが、同じスキルと意欲を持つ部下同士に違うリーダーシップを適用するのは不公平であり、部下が不平等感をつのらせ、モチベーションの低下を招いてしまいます。

リーダーシップも1つの仕組みと捉え、公平・公正さを大切にされた運用を心掛けることが大切です。

4. 状況対応型リーダーシップモデルと異郷訪問譚

大喜多（2015）では、状況対応型リーダーシップにおけるフォロワーの成熟度合いと異郷訪問譚との構造上の類似点を論じた。ここで、異郷訪問譚とは、民俗学における物語の形式を示す用語であり、通念に基づけば、物語の主人公が主人公にとっての異郷を訪問する物語形式のことをいう。日本における異郷訪問譚の実例には、「イザナギの黄泉国訪問」・「スサノヲの天上世界訪問譚」・「ホヨリの綿津見宮訪問譚」・「神功征韓譚」・「浦島子」・「甲賀三郎」などがある¹⁵。

まず、大喜多（2015）では、異郷訪問譚における構造上の共通の特徴が、物語の「前半と後半とが裏返しの関係」であるとする大林（1979）の説を紹介したうえで、このモデルが持つ特徴を以下のように述べた。

大林（一九七九）は裏返しモデルの特徴を次のように述べている。

「この昔話はいわばその前半と後半とが裏返しの関係になっている。つまり、前半で問題となったいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ同じテーマが問題になっていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとっている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去という形になっている。早く言えば、ポップの方法は、構造分析における syntagmatic な見方と, paradigmatic な見方の双方を統合する試みと言えよう¹⁶。」

このように、裏返しモデルにみいだされる特徴の一つは、物語の構成における「前

15 異郷訪問譚の形式は、日本の物語のみにみとめられるものではない。例えば、依田（1982）は、「パリ公主神話」・「作帝建伝説」などを韓国の異郷訪問譚の事例として掲げた。

16 一般的には、統辞的な見方と系列的な見方は対立すると考えられている。

半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現するという点である。もう一つの特徴は、前半の配列が、後半では反転しているという点である。この二点の特徴を具えたモデルのことを、大林は裏返しモデル¹⁷と称している。

大林（1979）では、裏返し構造がみとめられる事例として、「イザナギの黄泉国訪問」・「神功征韓譚」・「浦島子」・「甲賀三郎」を紹介しており、本稿2節の〈文体事象〉「日本（『古事記』・アイヌ口承伝承）」における「日本『古事記』」にて松村が引用した文献は大林（1984）である。なお、大林（1984）の初出論文は大林（1979）である。

一方、大喜多（2015）は、状況対応型リーダーシップにおけるフォロワーの成熟度合いについて、次のように述べた。

例えば R1 の「能力低い」と「意欲低い」が、R4 では「能力高い」と「意欲高い」では裏返えるように、R1 と R4、R2 と R3 の状況は、それぞれ対照的なものに変化を遂げる（裏返る）のである。

これを図式化すると以下のようなになる。

R1： 能力低い・意欲低い

R2： 能力低い・意欲高い

R3： 能力高い・意欲低い

R4： 能力高い・意欲高い

つまり、R1 と R4、R2 と R3 はそれぞれ対照的である。

そもそも、異郷訪問譚では、異郷への訪問をきっかけに主人公が成長するタイプがある（例えば、西條：2009）。勝俣（2010）は、異郷訪問譚に共通する要素について言及しているが、そのなかの一つとして以下の特徴を提示した。

多くの場合、異郷訪問の前に比べて、心身共に鍛えられ、敵対者を打倒できる力を得て、異郷から戻ってくる。このことは、異郷訪問が、地上の支配者とな

17 大林（1979）は、「裏返しモデル」に基づく構造を「裏返しの構造」と呼んだ。本稿ではかかる「裏返しの構造」を「裏返し構造」と呼ぶことにする。

るための一種の修行の場の如き意味合いを持っていることを示していよう。

つまり、異郷での体験を通じて主人公が「心身共に鍛えられ」るようなタイプであれば、その異郷訪問譚には、いわゆる成長物語としての側面があるといえる。また、状況対応型リーダーシップでは、フォロワーの「成長を促すようなリーダーシップスタイルをとらなければならない」（日野：2006）。見方を変えれば、フォロワーの成熟過程そのものを、フォロワーの「成長物語」（大喜多：2015）とみなすことができる。以上を踏まえ、大喜多（2015）は、状況対応型リーダーシップにおけるフォロワーの成熟過程の様態が、裏返し構造の様態と事実上同一であることを述べた。

大喜多（2016a）では、以下のAとBの双方の特徴を持つ構造を、裏返し構造の特徴と定義した。

A：物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する。

B：物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する。

なお、本稿では、Aが示す特徴を「特徴A」と呼び、Bが示す特徴を「特徴B」と呼ぶ。そのうえで、大喜多（2017）では、裏返し構造とキアスムスとの関係を以下のように述べた。なお、大喜多（2017）における「特徴A」と「特徴B」の定義は、本稿のものと同じである。

交差対句¹⁸における「複数の「語」・「句」・「節」の対があたかも合わせ鏡のように配列する形式」は、まさに「物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する」（特徴B）のであるから、両者は言い方が違うだけで、3節で示した交差対句の特徴は、4節に示した裏返し構造の特徴Bと同じ意味である。

一方、裏返し構造の特徴Aでは、裏返し構造の場合、要素どうしは、「否定」・「対立」・「対照」のいずれかの関連を持つ。つまり、対応のすべてが「否定」・「対立」・「対照」の内のいずれかの関連にある交差対句を、本稿では裏返し構造と見

18 「交差対句」はキアスムスの日本語での呼称の一つである。

做すこととする。

簡単にいえば、すべての対応が「否定」・「対立」・「対照」のいずれかになっているキアスムスのことを「裏返し構造」と称する。つまり、裏返し構造は、キアスムスの構造上の下位の概念である。

また、かかるフォロワーに対するリーダーシップのスタイルは、フォロワーの成熟過程に応じて $S1 \rightarrow S2 \rightarrow S3 \rightarrow S4$ と逐次変容する。これを図式化した場合、次のようになる。

- S1： 教示型
- S2： 説得型
- S3： 参加型
- S4： 委任型

この4種類の型のリーダーシップスタイルは、フォロワーの成熟度合いに応じたスタイルである。フォロワーの成熟度合いがキアスムス形式であるとするれば、当然に、かかるリーダーシップスタイルの変容もキアスムス形式になる。

こうした、状況対応型リーダーシップモデルと異郷訪問譚の構造的な類似点について、大喜多(2016b)では、典型的な異郷訪問譚の一つである「イザナギの黄泉国訪問譚」との対照を試みた。以下は大喜多(2016b)の引用である。

イザナギが辿った過程を対応させると、R1は、「馴質異化」、つまりイザナミを失ったことにより悲嘆に暮れ、日常が異質化した状況に相当する。なお、R1によれば、主人公は能力が低く、意欲が低い状況として表現される。

続いて、イザナギが当面の目標を、イザナミと出会い、この世に取り戻すことに定め、黄泉へと向かう「高揚」である。これはR2である。ここではイザナギは前段階に比べ意欲が高い。一方、イザナギはその後のことを考えている訳ではなく、現実に対応する能力としては低い段階に留まっている。

その後、イザナギはイザナミと出会うことにより「落胆」する。これはR3に当たる。つまり、イザナギの意欲は落胆し薄れるのだが、現実に対応する能力についてはむしろ高くなり、追走される状況を、知恵を使い振り切るのである。

そしてイザナギはイザナミと別離し、「異質馴化」となる。これはR4である。この時点で、イザナギは新しい生き方を選択し、能力・意欲共に高い状態になっ

ている。

なお、イザナギの過程では、「馴質異化」の前に「旧日常」が、「異質馴化」の後に「新日常」があるが、これを状況対応リーダーシップ理論に対照すれば、「旧日常」はフォロワーがリーダーとの関係を構築する前の段階であり、「新日常」はフォロワーがリーダーを必要としなくなった段階であると言えよう。

つまり、「イザナギの黄泉国訪問譚」の構造と状況対応型リーダーシップモデルにおけるレディネスの変容の関係は、下記のような図式で表現できる。

＜イザナギの黄泉国訪問譚＞	・・・	＜リーダーシップモデル＞
A 旧日常	・・・	以前
B 馴質異化	・・・	R1 能力(低)/意欲(低)
C 黄泉国への訪問	・・・	R2 能力(低)/意欲(高)
X 変異したイザナミを目撃	・・・	きっかけ
C´ 黄泉の国から帰還	・・・	R3 能力(高)/意欲(低)
B´ 異質馴化	・・・	R4 能力(高)/意欲(高)
A´ 新日常	・・・	以後

かかる図式に基づけば、「イザナギの黄泉国訪問譚」は以下の要素からなる。イザナギは、イザナミと旧日常のなかにいた(A)。ところが、イザナミの死により日常が異化する(B)。イザナミは、失ったイザナミを求めて黄泉国を訪問する(C)。黄泉国にて、変わり果てたイザナミと出会ったイザナギは衝撃を受け(X)、黄泉国から帰還する(C´)。イザナギはイザナミの死を受容し(B´)、イザナギとイザナミの新日常が開始する(A´)。これを、状況対応型リーダーシップモデルのレディネスの変容と対比すれば、BがR1、CがR2、C´がR3、B´がR4にそれぞれ相当する。なお、Aは、リーダーによるリーダーシップが開始される前のフォロワーの状況であり、A´は、リーダーシップが終了した後のフォロワーの状況である。また、Xは、フォロワーがR2からR3へと変革するきっかけの出来事である¹⁹。このように、イザナギの心性の変化の様子は、状況対応型リーダーシップにおけるフォロワーの変化と一致していることがわかる。

19 当該箇所におけるイザナギの変化について、網(2018)は「R2からR3への変化には、他律的から自律的への質的变化」があることを述べている。

しかしながら、状況対応型リーダーシップモデルは、あくまでもリーダーシップモデルであるからには、当然に、リーダーが存在する。一方、「イザナギの黄泉国訪問譚」には、イザナギを指導するリーダーの存在はみとめられない。この点は双方の構造における相違点である。換言すれば、リーダーの在・不在の差異はあるものの、状況対応型リーダーシップにおいてフォロワーが順当に成熟過程を進んだとすれば、異郷訪問譚が示す主人公の成長過程と一致するといえる。

5. 成熟度とキアスムス

前節では、状況対応型リーダーシップにおけるフォロワーの成熟過程が事実上の成長物語であり、かかる構造が、代表的な異郷訪問譚である「イザナギの黄泉国訪問譚」と類似していることを述べた。ここで、リーダーシップには、その前提となる目標設定がある。つまり、リーダーがフォロワーに対し、まず目標を提示することにより、リーダーシップが開始する。また、リーダーシップの成果は、かかる提示された目標が達成されたかにある。前節の「イザナギの黄泉国訪問譚」では、構造こそレディネス変容の様態と類似しているが、その前提となるリーダーと、リーダーによる目標設定が存在しない。本節では、リーダーが存在する物語の事例として、聖書における「イサク燔祭物語」を紹介し、これを状況対応型リーダーシップモデルにみとめられる構造と対比してみる。

「イサク燔祭物語」は、旧約聖書の創世記 22 章 1 節から 19 節に記載された物語である。以下は、筆者によるあらすじである。なお、便宜上、あらすじにはアルファベット・記号を付した。

〔A/〕 アブラハムは、一人息子であるイサクを燔祭として捧げるように、神から命令された。翌朝、アブラハムはイサクを連れ、二人の従者とともに神の命じられたモリヤ山に向かった。〔/A〕〔B/〕 アブラハムは二人の従者を待機させ、イサクとともに燔祭をおこなう場所に向かった。イサクは、本来燔祭とすべきである小羊の所在をアブラハムに問うた。アブラハムは、当該小羊は神が備えるであろうことをイサクに告げた。〔/B〕〔C/〕 アブラハムはイサクを祭壇に据え、燔祭として殺そうとした。〔/C〕〔C´/〕 その時、神の使いが、かかる殺害を止めた。〔/C´〕〔B´/〕 アブラハムは、角を藪にかけた雄羊をみつけ、それをとらえ、燔祭とした。〔/B´〕〔A´/〕 神の使いは、アブラハムが言葉に従ったことを以て、彼に祝福を授けた。アブラハムは従者たちのもとにもどり、ともにベエルシバへ

と行った. [/A´]

この物語の主人公はアブラハムである。物語におけるモリヤ山への訪問は、神の命令によって開始し、アブラハムが神の命令に従ったことが評価され、物語は終結に至る。つまり、この物語におけるリーダーは、神あるいは神の使いであり、アブラハムに与えた目標は、表層的には「神の言葉に従うこと」であるといえる。そうであれば、アブラハムはフォロワーの立場となる。

リーダー：神あるいは神の使い

フォロワー：アブラハム

表層的目標：神の言葉に従うこと

ここで、上述の物語を、あらすじに付したアルファベット・記号に基づき図式化すると以下ようになる。

- A 神の命令 <提示>
- B 本来的燔祭 <否定>
- C 殺害 <実行>
- C´ 殺害 <実行の否定>
- B´ 本来的燔祭 <否定の否定>
- A´ 神の命令 <成就>

AとA´は、「神の命令」がテーマである。Aでは、命令が<提示>され、A´ではこれが<成就>する。BとB´は、「本来的燔祭」がテーマである。従来、アブラハムやイサクは、羊を燔祭としていたのであり、本稿ではこれを「本来的燔祭」と位置付けた。Bでは、イサクがアブラハムに、燔祭とすべく羊がないことを告げ、アブラハムはこの状態を受容した。つまり、これは、「本来的燔祭」が<否定>された状態を、アブラハムとイサクが共有し、かつ、受容したことを意味する。対し、B´では、彼らにより「本来的燔祭」がおこなわれた。これは、「本来的燔祭」が否定された状態の否定である。CとC´は、「殺害」がテーマである。Cでは、Aでの神の命令をアブラハムが<実行>しようとする。それに対し、C´では、神の使いがアブラハムの<実行>を否定し、これを阻止する。かかる<実行の否定>は、同時に、神の使いによる、神の命令への否定でもある。

さきほどは、神がアブラハムに提示した目標が表層的には「神の言葉に従うこと」であると書いた。これによって、アブラハムが得た報酬は、以下の創世記 22 章 16 節から 18 節にあらわされた神による「祝福」であった（日本聖書協会：1955）。

わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかつたので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである。

つまり、神が直接的にアブラハムに提示した命令は「イサクを燔祭とすること」であり、表層的には、神の言葉に従うか否かが目標達成の尺度であるといえる。しかし実際は、神の使いは、これを否定したうえで、神は報酬として「祝福」を与えたのであり、神の深層的な目標は、かかる「祝福」の授与（あるいは、アブラハムが神の「祝福」を授与され得る人物になること）であるといえる。

リーダー：神あるいは神の使い

フォロワー：アブラハム

深層的目標：報酬としての「祝福」

以上を、状況対応型リーダーシップのレディネス変容と対比してみる。まず、A では、リーダー（神あるいは神の使い）によりアブラハムが目標を提示される。B では、神の命令は提示されたものの、アブラハムは逡巡していることが予想できる（つまり、アブラハムの「意欲」は低い状態である）。C では、アブラハムは意を決する（アブラハムの「意欲」は高い状態である）。C' では、かかる意を決した状況から、一転し、安堵あるいは脱力した状態であろう（この時点でアブラハムの「意欲」は低い状態になる）。B' では再び燔祭を実行する充実した状態であるといえる（再び、アブラハムの「意欲」は高い状態になる）。そして、A' では神からの報酬を受け取るのである。このように、アブラハムの「意欲」は、低→高→低→高、と変化する。一方、「能力」面ではどうであろうか。神がアブラハムに与えた目標は、表層的にはイサクの殺害である。だが、深層的な目標は、「祝福」の授与であり、その資格をアブラハムが受けるところにある。つまり、B と C では、アブラハムには資格を受ける「能力」がない。一方、B' と C' ではかかる資格が認定され、「能力」がある立場になる。以上を踏

まえば、アブラハムの「能力」は、低→低→高→高、と変化する。

＜イサク燔祭物語＞	＜リーダーシップモデル＞
A 神の命令 <授与>	: 命令 . . . 開始
B 本来的燔祭 <否定>	: 逡巡 . . . R1 能力(低)/意欲(低)
C 殺害 <実行>	: 決意 . . . R2 能力(低)/意欲(高)
C´ 殺害 <実行の否定>	: 安堵 . . . R3 能力(高)/意欲(低)
B´ 本来的燔祭 <否定の否定>	: 充実 . . . R4 能力(高)/意欲(高)
A´ 神の命令 <成就>	: 成就 . . . 終了

この「イサク燔祭物語」がはたして異郷訪問譚といえるのか、については議論があるろう²⁰が、上述のように、この物語におけるアブラハムの変化は、状況対応型リーダーシップにおけるフォロワーの成熟度合いと一致しているといえる。

一般的に、日常が異化することにより物語が開始し、かかる日常の異質が馴化することにより新しい日常が編成され、物語は終了するといえる（シクロフスキー：1971）。多くの異郷訪問譚（あるいは他の形式の物語）では、実際にこうした構造になると予想できる。異郷訪問譚の主人公の変化と、状況対応型リーダーシップのフォロワーの成熟度の進展が、完全な対応関係にあるかについては今後検証するつもりであるが、いずれにせよ、当該フォロワー成熟度の構造はキアスムスである。Lacanの指摘のごとく、記憶の事実性以上に物語性が精神分析においては価値視される（例えば、立木：2011）。この点は、フォロワーの成熟過程においても同様であるのではなかろうか。

6. キアスムスの核の機能と R2・R3 の境界

キアスムスでは、しばしば、その構造上の中央に位置する折り返し部分である核(X)²¹の機能に注目される。かかる核の機能について、McCoy(2003)は次のように述べた。

20 本稿の目的は、当該物語が異郷訪問譚であるかを議論するところにはない。

21 キアスムスには、核の部分が対をなさないタイプと、対をなすタイプがある。例えば、4節の「イザナギの黄泉国訪問譚」のキアスムスは、核の部分が対をなさないタイプであり、5節の「イサク燔祭物語」のキアスムスは、対をなすタイプである。

One scholar who has specialized in the literary form and structure of the Old Testament is convinced Genesis through Deuteronomy plus the book of Joshua (all six of which he collectively labels “the Hexateuch”) form one enormous macrochiasm with the covenant at Sinai (Exodus 19:3-Numbers 10:10) as the central and climactic (X) component.

つまり、McCoy (2003) によれば、核は、物語のクライマックスを示す機能を持つ。同様の見解は、例えば、Luter & Lee (1995) や森 (2007) でもみとめられる。

ところで、物語におけるクライマックスとは、一般的には、物語が最高潮に盛り上がった場面のことをいうのだが、二瓶 (2006) は、国語教育の分野において、かかる物語のクライマックスに関連し、次のように述べた²²。

クライマックスの定義として、私は野火っ子たちに「あること、または、中心人物の『心』が最も大きく転換するところ（一文）」と伝えた。この定義に従って、子どもたちは「太一の心が最も大きく変わった一文」を検討した。そして、文章を載せた二人とも、②の「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」の会話をクライマックスに決定している。

簡単にいえば、二瓶は、「物語全体を通して、あること（中心人物の心）が最も大きく変わるところ」を、物語におけるクライマックスと定義している（倉又：2014）。本稿では、二瓶における国語教育上のクライマックスの定義を援用し、キアスムスの核が示すクライマックスが、中心人物の心が最も大きく変化する箇所であると仮定する。

「イザナギの黄泉国訪問譚」のキアスムスの場合、核は、X「変異したイザナミを目撃」の場面である。イザナギは、既に変容したイザナミの姿を目撃することにより、イザナミとの対面に希望を抱いていたイザナギの心性（「高揚」）が変化し、絶望と驚愕の淵に落とされる（「落胆」）。同時に、これは、イザナギの自立を促す出来事でもあった。また、「イサク燔祭物語」の場合は、核は、C「殺害<実行>」・C'「殺害<実行の否定>」である。核の前におけるアブラハムは、イサクを殺害しなければならないという絶望の淵にある。それに対して、核の後では、アブラハムは安堵している。

22 ここでは国語教材『海のいのち』を分析している。

物語	核の前	核の後
イザナギの黄泉国訪問譚	高揚	落胆
イサク燔祭物語	絶望	安堵

以上のように、双方の物語では、核の前後で「中心人物の心」が大きく変化している。

R2 から R3 への移行は、リーダーの立場からみれば、S2（説得あるいはコーチ型）から S3（参加あるいは援助型）への移行である。また、R2 においては、リーダーの意思決定に関する説明を受けつつ、フォロワーが、自立への援助を受ける立場であるが、R3 では、十全ではないもののフォロワーが意思決定に参加する立場になる。つまり、R3 は、事実上、意思決定に対するフォロワーの参加の開始であり、自立への出発でもある。フォロワーは、R1 および R2 では他律的²³ 立場であるが、R2 と R3 の境界における他律から自律への質的転換があり、R3 および R4 では自律的立場²⁴ へと転ずる（網：2018）。

R1・R2 ：他律的立場

R2 と R3 の境界：質的転換（他律→自律）

R3・R4 ：自律的立場

「イザナギの黄泉国訪問譚」では、イザナギはイザナミの現実を直視することにより、イザナミからの「自立」を開始した。つまり、核は、イザナギの「自立」の起点である。また、「イサク燔祭物語」では、核の前における、アブラハムの燔祭に臨む姿勢は他律的であったと推測できるが、核の後では一転し、その姿勢は自律的であるといえる²⁵。かかる双方の核は、両物語のクライマックスの機能を持つ。同様に、状況対応型リーダーシップでは、R2 から R3 への移行が、フォロワーの成長におけるクライマックス箇所であるといえる。

23 リーダーの働きかけによりタスクを遂行する立場のこと。つまり、リーダーが主であり、フォロワーが従である。

24 フォロワーの意思によりタスクを遂行する立場のこと。つまり、フォロワーが主であり、リーダーが従である。

25 核の前後では、燔祭とする対象が異なる。核の前ではイサクが対象であるが、核の後では羊が対象である。ここで、イサクを対象とする燔祭は神の指示によるものである。対し、羊を対象とする燔祭では、当該聖書箇所には、かかる燔祭が神の指示であるとは書かれていない。

7. おわりに

本稿では、文体事象としてのキアスムスに関する研究史を概観した。同時に、松村(2020)やPelkey(2013)らによるキアスムス研究における文体以外の事象での広がりを紹介した。キアスムスが発現する機序に関しては、かかる発現が左脳と右脳の双方の機能に関連しているという立場(Douglas:2007, Nänny:1988)に立てば、当該構造は、単なる「文体のあや」ではない。むしろ、人間の根本的な心性のあり方に深く関わる、「概念や言語以前の心のパターン」(Bruhn:2015)である。

以上を踏まえ、本稿では、状況対応型リーダーシップの形式が、はたしてキアスムス形式であるか、の検討をした。その結果、当該リーダーシップモデルは、大喜多(2015)によれば裏返し構造である。かかる裏返し構造は、キアスムスの構造上の下位の概念であり、つまりはキアスムスの一種である。4節で述べたように、異郷訪問譚および状況対応型リーダーシップモデルは、「成長物語」とみなすことができる点において共通している。そうであるならば、例えば、いわゆるエリクソンのライフサイクル論(例えば、Erikson:1959)が示したような人間の心理的発達と統合の様態変化(例えば、柳沢:1985)についてはどうであろうか。こうした点も、今後検証したい。また、一連の他のリーダーシップモデル(小久保:2007)の場合はどうなのか²⁶、についてもこれからの検証課題である。

引用文献

- Bourdieu, P, 1979, *La Distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Les Editions de Minuit.
- Bruhn, MJ, 2015, A Mirror on the Mind: Stevens, Chiasmus, and Autism Spectrum Disorder, *Wallace Stevens Journal*, 39(2), pp. 182-206.
- Bühlmann, W & Scherer, K, *Stilfiguren der Bibel, Stilfiguren der Bibel, Ein kleines Nachschlagewerk (BiBe)*, Einsiedeln u.a.
- Carter, P, 2010, The chi complex and ambiguities of meeting, *CLCWeb: Comparative Literature and Culture* 12(4), Online: <https://docs.lib.purdue.edu/clcweb/vol12/>

26 リーダーシップ理論といえるかの検討は必要であるが、状況対応型リーダーシップモデルに類似した構造を持つ、認知的徒弟制(Cognitive Apprenticeship)の場合はどうであるかについても検証するつもりである。

- iss4/4/. May 28, 2021.
- Douglas, M, 2007, *Thinking in circles: An essay on ring composition*, Yale University Press.
- Erikson, EH, 1959, Identity and the Life Cycle, *Psychological Issues*, 1(1), New York: International Universities Press.
- Fahnestock, J, 1999, Antimetabole. *Rhetorical figures in science*, pp. 122-155, Oxford: Oxford University Press.
- Gasché, R, 1999, Reading Chiasms, *In Of minimal things: Studies on the notion of relation*, pp. 263-284, Stanford: Stanford University Press.
- Grausso, CM, 2020, *Chiasmus: a phenomenon of language, body and perception* (Doctoral dissertation, University of Edinburgh).
- Heil, JP, 2007, *Ephesians: Empowerment to walk in love for the unity of all in Christ* (Studies in Biblical Literature 13), Atlanta: Society of Biblical Literature.
- Isar, N, 2005, Undoing forgetfulness: Chiasmus of poetical mind – a cultural paradigm of archetypal imagination, *Europe's Journal of Psychology*, 1(3).
- Luter, AB & Lee, MV, 1995, Philippians as Chiasmus: Key to the Structure, Unity and Theme Questions, *New Testament Studies*, 41(1), pp. 89-101.
- McCoy, B, 2003, Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Biblical Literature, *Chafer Theological Seminary Journal*, 9, pp. 18-34.
- McLuhan, M & McLuhan, E, 1988, *Laws of media: The new science*, Toronto: University of Toronto Press.
- Merleau-Ponty, M, 1964, The intertwining – the chiasm. In Claude Lefort (ed.), *Le Visible et l'invisible: The Visible and the Invisible*, pp. 130-155. Alphonso Lingis (trans.), Editions Gallimard, Paris. Evanston: Northwestern University Press.
- Nänny, M, 1988, Chiasmus in literature: Ornament or function?, *Word & Image*, 4(1), pp. 51-59.
- Pelkey, J, 2013, Cognitive chiasmus: Embodied phenomenology in Dylan Thomas. *Journal of literary semantics*, 42(1), pp. 79-114.
- Pelkey, J, 2017a, Greimas embodied: How kinesthetic opposition grounds the semiotic square, *Semiotica*, 2017(214), pp. 277-305.
- Pelkey, J, 2017b, *The semiotics of X: Chiasmus, cognition, and extreme body memory*. Bloomsbury Publishing.
- Strecker, IA & Tyler, SA (eds.), 2009, *Culture and rhetoric*, New York/Oxford: Berghahn

Books.

Turner, M, 1991, *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*.

Princeton: Princeton UP.

Wiseman, B & Paul, A (eds.), 2014, *Chiasmus and Culture* (Studies in Rhetoric and Culture 6), Oxford/New York: Berghahn Books.

網あづさ, 2016, 『12のリーダーシップ・ストーリー』, 生産性出版.

網あづさ, 2018, “イザナギと状況対応リーダーシップ[®]”, researchmap, https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/97795/331d12416cf743af9d4ec1c116d8f4d9?frame_id=585220, (参照, 2021年5月28日).

網あづさ, 2019, “状況対応リーダーシップ[®]活用のヒント!”, リーダーシップ研究アカデミー・CLS Japan 本部, <https://sl-tips.blogspot.com/2019/03/blog-post.html>, (参照, 2021年3月10日).

飯謙, 2010, 「第5ダビデ詩集(詩138-145編)の構造と主題:敵対者記述を手がかりに」『神戸女学院大学論集』, 57(1), 1 - 14, 神戸女学院大学.

大喜多紀明, 2015, 「異郷訪問譚と状況対応リーダーシップ理論の構造的共通点:成長物語の観点から」『民俗文化』, (618), 7145 - 7147, 滋賀民俗学会.

大喜多紀明, 2016a, 「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造:異郷訪問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』, (14), 45 - 72, 北海道言語研究会.

大喜多紀明, 2016b, 「異郷訪問譚と状況対応リーダーシップ理論の対照:「馴質異化」と「異質馴化」の観点から」『民俗文化』, (636), 7361 - 7362, 滋賀民俗学会.

大喜多紀明, 2017, 「聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造:異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例」『北海道言語文化研究』, (15), 195 - 216, 北海道言語研究会.

大喜多紀明, 2019, 「新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造:「物語」とはいえないテキストの事例」『人間生活文化研究』, (29), 15 - 21, 大妻女子大学人間生活文化研究所.

大林太良, 1979, 「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』, (2), 1 - 9, 口承文芸学会.

大林太良, 1984, 「異郷訪問譚の構造」『東アジアの王権神話:日本・朝鮮・琉球』, 弘文堂.

勝俣隆, 2010, 『異郷訪問譚・来訪譚の研究:上代日本文学編』, 和泉書院.

倉又圭佑, 2014 「物語教材における読解力を高める指導方法の工夫:クライマックスの一文検討を通して」『教育実践研究』, 24, 43 - 48, 上越教育大学学校教育実践研究センター.

- 小久保みどり, 2007, 「リーダーシップ研究の最新動向」『立命館経営学』, 45(5), 23 - 34, 立命館大学経営学会.
- 西條勉, 2009, 『千と千尋の神話学』, 新典社.
- 佐々木寛治, 1997, 「わたしを見たから信じるのか」: ヨハネ「福音書」における交錯配列法の光の下での $\theta \varepsilon \omega \rho \varepsilon \iota \nu$ 『中国短期大学紀要』, (28), 141 - 173, 中国短期大学.
- シーエルエス・グループ, 2005, 『行動科学入門: 状況対応リーダーシップの理論と実践』, 生産性出版.
- シクロフスキー, 水野忠夫 (訳), 1971, 『散文の理論』, せりか書房.
- 品川嘉也 & 菊池美也子, 1986, 「大脳半球機能」『日本医科大学雑誌』, 53(2), 209 - 211.
- 白井康嗣, 2020, “状況対応型リーダーシップ: SL理論”, 白井経営コンサルティング事務所, <https://shirai-consulting.com/situational-leadership/>, (参照, 2021年3月10日).
- 城俊幸, 2016, 「ロマ 11:25-36 のパウロの救済史理解: イスラエルの救いの時と異邦人の救いの時のずれ」『西南学院大学大学院研究論集』, 2, 107 - 122, 西南学院大学大学院.
- 高橋吉文, 2009, 「新<起承転結>考 I」『メディア・コミュニケーション研究』, 55, 39 - 118, 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院.
- 立木康介, 2011, 「精神分析と父」『人文學報』, 101, 103 - 112, 京都大学人文科学研究所.
- 二瓶弘行, 2006, 『“夢”の国語教室創造記: クラスすべての子どもに確かな力を』, 東洋館出版社.
- 日本聖書協会 (翻訳), 1955, 『口語訳聖書』, 日本聖書協会.
- 野本真也, 1978, 「旧約学における文芸学的方法の位置」『基督教研究』, 42(1), 1 - 35, 基督教研究会.
- 柗曉生, 2018, 「なぜヨセフの告知は夢によるのか: マタイ福音書における夢の実現と預言の成就」『南山神学』, (41), 1 - 20, 神言神学院.
- 日野健太, 2006, 「リーダーシップのコンティンジェンシー理論におけるフォロワーの再考: 状況から認識主体へ」『駒大経営研究』, 38, 19 - 60, 駒沢大学経営研究所.
- 藤森裕治, 2014, 「『更級日記』の対称性: 空間論的分析による古典文学教材研究」『国語科教育』, 75, 88 - 95, 全国大学国語教育学会.

- 堀川明, 2008, 「科学・技術の発展と右脳・左脳の役割」『繊維機械学会誌』, 61(5), 345 - 350.
- 前川裕, 2013, 「ヨハネ福音書 11 章で語られる救済思想: その提示方法を中心に」『神学研究』, (60), 25 - 39, 関西学院大学神学研究会.
- 前田博子, 山口泰雄, 竹下俊一, 2015, 「スポーツクラブの学生ボランティア指導者が期待するリーダーシップ行動: SL 理論モデルを用いた事例研究」『スポーツ産業学研究』, 25(2), 217 - 229, 日本スポーツ産業学会.
- 松村一男, 2020, 「三つの構造: キアスムス, プロップ, レヴィ=ストロース」『和光大学表現学部紀要』, (20), 79 - 98, 和光大学表現学部.
- 宮本久雄, 2009, 「アウグスティヌス文学のヘブライ的地平: 『告白録』 第一~第九巻における「キアスムス (交差対応的配列法)」構造」『パトリスティカ: 教父研究』, 13, 142 - 148, 教父研究会.
- 村井源, 2009, 「マルコ福音書の多層集中構造」『日本カトリック神学会誌』, (20), 65 - 95, 日本カトリック神学会.
- 村井源, 2011, 「デジタルアーカイブを用いた古典修辞構造検証手法の検討」『じんもんこん 2011 論文集』, (8), 211 - 218, 情報処理学会.
- 森彬, 2007, 『ルカ福音書の集中構造』, キリスト新聞社.
- 柳沢昌一, 1985, 「EH エリクソンの心理社会的発達理論における「世代のサイクル」の視点」『教育学研究』, 52(4), 396 - 406, 日本教育学会機関誌編集委員会.
- 依田千百子, 1982, 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』, (5), 47 - 57, 日本口承文芸学会.